

## 2024年6月2日（日）「神の刻印」

ヨハネの黙示録 7:1-8

1 この後、私は地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、地の四隅から吹く風を押しさえ、地にも海にもどの木にも吹きつけないようにしていた。2 また私は、別の天使が生ける神の刻印を携え、日の出る方から上って来るのを見た。その天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に向かって大声で叫んで、3 言った。「私たちが神の僕の額に刻印を押すまでは、大地も海も木々も損なってはならない。」4 私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。

5 ユダ族の中から一万二千人が刻印を押され、ルベン族の中から一万二千人、ガド族の中から一万二千人、6 アシェル族の中から一万二千人、ナフタリ族の中から一万二千人、マナセ族の中から一万二千人、7 シメオン族の中から一万二千人、レビ族の中から一万二千人、イッサカル族の中から一万二千人、8 ゼブルン族の中から一万二千人、ヨセフ族の中から一万二千人、ベニヤミン族の中から一万二千人が刻印を押された。

### 【序論】

聖書全体を読んでおられますと、ある一つのテーマを様々な角度から表現していることが分かります。その一つに「義の衣」というものがありますが、このテーマを拾い集めるだけでも聖書通読は面白くなるでしょう。神（キリスト）の義を身に纏っている人に対しては神の裁きが下らないというメッセージです。旧約聖書からいくつかの例を挙げてみましょう。

- ・ アダムとエバに着せられた皮の衣（創世 3:21）
- ・ ノアの箱舟（創世 6～8 章）
- ・ 出エジプト時にイスラエル人の家の門柱と鴨居に塗られた小羊の血（出 12:21-28）
- ・ カナンの地に侵攻したイスラエルからラハブ一家を守った赤い紐（ヨシュア 2:15-21）

その他にも多くの箇所がありますが、祭司が着る衣服などもそれを暗示しているのではないかと私は考えています。

今日の箇所には、信者の額に「神の刻印」が押されるという内容が出てきますが、これも本質的に同じことを伝えているでしょう。神の裁きが地上に下るとき信者を守るものとして与えられる「しるし」です。

### 【本論】

今日から7章に入りますが、本章は第六の封印と第七の封印の間に挿し込まれている「幕間劇」のような役割を果たしています。第七の封印は8章において開かれることになりませんが、その前に天における二つの光景が描かれます。第一に「刻印を押されたイスラエルの子ら」（7:1-8）、第二に「白い衣を着た諸国民からの群衆」（7:9-17）です。

## 本論 1. 四人の天使による守護

この後、私は地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、地の四隅から吹く風を押さえ、地にも海にもどの木にも吹きつけないようにしていた。(7:1)

第六の封印が解かれたときに生じた天変地異の数々——大地震、天体の異変、天の崩壊、地形の変動(6:12-14)——、そしてそれを目の当たりにした神への敵対者たちの叫びと行動(6:15-17)を前提とし、そのような恐ろしい状況下であって神の民が天使によってガッチリと守られている様子が描かれています。

「地の四隅」という表現は古代オリエントの世界観を背景としており、黙示録が書かれた当時、大地は水の上に浮かぶ四角形の平面だと考えられていたことが反映されています。おそらく東西南北を意味するのでしょう。その四隅から吹き付ける風は地に災いをもたらし、各辺から吹く風は幸いをもたらすと考えられていました。旧約聖書の中にも類似する表現が繰り返し出てきます。

- ・ 私はエラムに向かって、天の四隅から四方の風をもたらす。私が彼らをこのすべての風で吹き散らすのでエラムの散らされた者が逃れて来ない国はなくなる。(エレミヤ 49:36)
- ・ この雄山羊は非常に高ぶった。だが、強くなったときに大きな角がへし折られ、その代わりに四本の際立った角が生え出て、天の四方に向かった。(ダニエル 8:8)
- ・ 災いだ、災いだ、北の地から逃げよ——主の仰せ。天の四方の風のように、私があなたがたを散らしたからだ——主の仰せ。(ゼカリヤ 2:10)

災いの風が地の四隅から吹こうとするとき、「四人の天使」がそれを阻止するために立ちました。それは、神の民が生き残って(Remnant)新天新地が創造されるための礎となるためです。これはノアの箱舟の出来事とも似ています(創世 6～8章)。ノアは神が地を洪水で滅ぼされたとき、箱舟を作って家族と各動物のつがいとともに生き延びました。そして、新しく造られた世界にノアの子孫が満ちていきました。その後の歴史は再び神への反逆を繰り返し今に至っていますが、最終的な地の崩壊の次には究極的な神の国が現れるため、もはや神への反逆はないでしょう。

## 本論 2. 神の刻印

また私は、別の天使が生ける神の刻印を携え、日の出る方から上って来るのを見た。その天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に向かって大声で叫んで、言った。「私たちが神の僕の額に刻印を押すまでは、大地も海も木々も損なってはならない。」

(7:2-3)

ここに登場するもう一人の天使。この天使は先の四人の天使よりも更に位が上のようで、彼らに「まだ災いを下すな」と命じています。「日の出る方」とは「東から」という意味。東は太陽が昇る方角で、楽園があり、メシアが来られるところだと信じられていました。根拠となる聖句を取り上げてみましょう。

誰が東から勝利を奮い起こし、足元に呼び寄せたのか。彼の前に諸国民を渡し、王たちを踏みにじらせ、その剣で彼らを塵のように、その弓で吹き払われたわらのようにする。

(イザヤ 41:2)

東からやって来る天使は、神の民に「**神の刻印**」を押します。これは「神の所有」であることの証明であり、小羊イエスの名が書き記されるということです。この刻印が押された人は、来るべき災いのときに神の守りの御手の中に置かれることになる。四人の天使がもたらそうとしている地への災いの前に、過越の晩に小羊の血が塗られたイスラエル人の家の門柱と鴨居のように、神の怒りが過ぎ去るための目印となるのです。聖書の中にこれを意味する描写は非常に多い。

主イエスを信じるすべての人の額にこの刻印は押されています。これは目に見えない刻印であって、聖霊の内在を意味する。イエス・キリストへの信仰を公にした人には、人の目には見えませんが神の目には光り輝いて見える「キリスト」の文字が刻まれているのです。神はこの目印を見ることによって、その人に災いを下されない。すなわち、神の怒りは過ぎ去るのです。

この天使は、地上に神の民を探して歩き回っているようです。一人残らず刻印を押すために、世界中を巡り巡って信仰者を見出す。現在、尚も世の終わりが訪れないとすると、この天使が災いを留め、信仰者を見つけ出して刻印を押しているということなのでしょう。再臨はいつ来るのかと急ぐ人々は、この天使の足音に耳を澄ませなくてはなりません。

### 本論 3. 十四万四千人

**私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。(7:4)**

神の刻印を押された人の数が「**十四万四千人**」と言われています。この数字をどう解釈するかによって、人間の生き方は大きく違ってくることになる。

まず、これを文字通りに取る人々がいることを指摘しておきたいと思います。神の国に入れる人の数はこれほどまでに限定されているという考え方です。エホバの証人などはその代表例であり、自分がその救いから漏れることがないように、懸命に伝道して功德を積もうとします。また、ある思想を持つ人々は、地球上の人口をこの数にまで減らすことで神の国が完成すると考え、そのために実際、様々な悪を計画・実行しているようです。

一方で、「**十四万四千人**」を象徴的な数字として理解する人もいます。この数字は「完全性」を表す「12」に「12」をかけ、更にそれを「1000倍」とできるので、「完全なる神の民」を表していると考えます。「イスラエル十二部族」と「十二使徒」という、旧新約の神の民の全体を表しているのかもしれませんが。「12」を更に分解すると、三位一体なる神の「3」と地の四方を表す「4」が掛け合わされているとも考えられる。つまり、全世界・全歴史の神の民が神によって数え上げられているという意味になるのです。

ここでは後者の解釈に立って話を進めていきたいと思います。5～8節では、集められた人々が「イスラエル十二部族」の中から選ばれていると言われていました。

ユダ族の中から一万二千人が刻印を押され、ルベン族の中から一万二千人、ガド族の中から一万二千人、アシェル族の中から一万二千人、ナフタリ族の中から一万二千人、マナセ族の中から一万二千人、シメオン族の中から一万二千人、レビ族の中から一万二千人、イッサカル族の中から一万二千人、ゼブルン族の中から一万二千人、ヨセフ族の中から一万二千人、ベニヤミン族の中から一万二千人が刻印を押された。(7:5-8)

単純に「イスラエル十二部族」の部族名が列挙されているように見えますが、ここにはヨハネの黙示録にしかない特徴が現れています。

#### ①ユダ族の優先

本来ヤコブの長男はルベンだが、ユダがトップに置かれているのは、ユダ族の子孫としてキリストがお生まれになったことを表しているようです。

#### ②エフライム族の不在／ヨセフ族とマナセ族の追加

本来マナセとエフライムはヨセフの息子として一まとめにされることが多いですが、エフライムの名前はなく、マナセとヨセフの名前が挙げられています。エフライム族が偶像礼拝に陥っていた歴史が反映されているか（I列王 12:25、イザヤ 7:9, 17、ホセア 4:17-19）。

#### ③ダン部族の不在

ダン部族の名前が省略されているのは、この部族が初期の頃に偶像礼拝を行っていたからではないかと言われます（士師 18:30-31、I列王 12:29-30、エレミヤ 8:16）。

いずれにせよ、ここに登場するイスラエル十二部族は終末的な神の民の完全性を表すもので、そのことを黙示録の著者は何らかの意図をもって描こうとしているのでしょう。

### 【結論】

私たちも、「十四万四千人」の中の一人に数え挙げられていると信じます。神の刻印がこの額に押されているのでしょうか。目には見えませんが、主イエスを信じるすべての人の内に聖霊が住んでおられるということが、神の民として永遠の祝福に入れられていることの保証であります。聖霊によって神が我が内におられる。そのような存在となっているならば、神の怒りはその人を過ぎ去るのです。

## 【祈り】

主イエスを信じる者を永久に守り給う、天の父なる神様。私たちは永遠の世界であなたと共に生きることを願います。その歩みは地上の生涯の中で始めることができます。主イエスを信じたとき、私たちは「神のもの」として聖なる刻印を押していただいたのです。この目に見えないしるしが、私たちの生き方を通して見えるものとなっていきますように。聖霊が私たちの内で生きて働いておられることが、誰の目にも明らかとなる人生を歩ませてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
全世界からご自分の民を集め、御許で安らがせ給う、父なる神の愛、  
信じる者の額に「神の刻印」を押し、永久までも共にまし給う、主イエス・キリストの恵み、  
地上にあって永遠の祝福にあずからせ、豊かな実を結ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。